

階級闘争とパレスチナ人の自決権：オフエル・カシーフとのインタビュー

ターリア・バロンチェリー著、脇浜義明訳 *脚注は訳注

TheAnakysis news、2024年10月28日

以下はクネセト（イスラエル議会）のオフエル・カシーフ議員がパレスチナ国樹立とイスラエル人とパレスチナ人の平等を妨害する階級的利益について語ったものである。彼は米国主導の2国間合意であるアブラハム合意（イスラエルとUAE、イスラエルとバーレーンの国交正常化）が、中東地域に階級的不平等と資本家の軍産複合体利益を定着させ、パレスチナ人の自決権をもみ消す企てだと論じる。

ターリア・バロンチェリー：アナリシス・ニュースによろ。ターリア・バロンチェリーです。今日はクネセト議員のオフエル・カシーフさんにパレスチナ人の自決権と占領終結を妨げている階級問題について話してもらいます。カシーフさんはユダヤ人とアラブ人から成る左翼連合のハダシュ・タアル党のメンバーです。ハダシュ（平和と平等を求める民主戦線）は共産主義運動で、タアルはアラブ民族主義運動です。この連合党は、イスラエルとパレスチナに住むすべての人々の平等を求め、占領の終結を求めています。よろ、オフエル。

オフエル・カシーフ：お招き、ありがとうございます。

ターリア・バロンチェリー：国交正常化と言われていたアブラハム合意に関する階級的視点からの分析を聞かせてください。それはイスラエルとサウジアラビアのようなアラブ諸国との間の軍事協定を誘発し、それを中東問題の解決策として、パレスチナ人の自決権を含むパレスチナ問題を消滅させる試みのように見えます。経済的、軍事的利害という階級利益の促進を中東問題の解決策にしているように思えます。このアブラハム合意はある意味では今でも米国の政策なのでしょうか？そこには何の変化もありません。米国はガザ戦争が終わったらそれをさらに推進するつもりでしょう。

オフエル・カシーフ：おっしゃる通りです。アブラハム合意は権力の座にいる少数者、特に、前のインタビューで私が言及した経済勢力の利益になるもので、階級問題として捕らえる必要があります、私の主張を証明するものです。

クネセトでアブラハム合意に反対したのは我々ハダシュ・タアルだけでした。和平に反対すると言って我々は非難されましたが、とんでもない、和平を望むからアブラハム合意に反対したのです。我々は、パレスチナ問題の正しい解決、それはパレスチナ国建設を認めることですが、それがなくては和平はあり得ないと言いました。パレスチナ人を無視してはいけません。パレスチナ人を飛ばして中東問題を解決できません。前のインタビューで述べたように、アブラハム合意はパレスチナ人抜きの不浄な三位一体¹です。そんなものでは和平も、安全も、安定も生まれません。何故なら、それは核心的な問題、中東地域で現在進行している紛争の核になる問題を無視しているからです。

我々の主張は正しかった。10月7日の恐ろしい虐殺、私の親友がその犠牲になりましたが、ある意味では、それはパレスチナ人を無視したアブラハム合意の必然的結果です。こう言ったからといって、私はハマスの犯罪的行為を正当化するのではないことを、はっきり言っておきます。正義は言うまでもなく、安定、平和、安全を実現する道は、問題の核心、パレスチナ人民が置かれている状況という悪と不正を解決することがまず第一であることを理解しなければなりません。これがあなたの質問への答えです。これが私が言っていた階級問題なのです。アブラハム合意に関わった者たちは何故パレスチナ人を無視したのでしょうか。アブラハム合意が自分たちの経済的・政治的利益になるからです。その意味でそれは階級問題で、経済問題なのです。もう一度いいますが、彼らは良いことを何も生み出しません。パレスチナ人の解放だけが良いことを生み出すのです。

ターリア・バロンチェリー：どんな解決ですか。例えば、米務省の報道官マット・ミラーはいつも停戦と2国解決案に基づくパレスチナ国樹立を口にしています。多分7月19日だったと思いますが、クネセトでパレスチナ国創設に反対する決議が圧倒的多数で成立しました。パレスチナ国樹立に反対したのは68人か69人で、賛成したのは僅か9票でした。欧米ら西側の政府は口先では2国解決案支持を表明していますが、現実には西岸地区が違法な入植地拡大・建設やイスラエルの土地没収でどんどん縮小していることを黙認しています。あなたは西岸地区の過激入植者4人が処罰されたとおっしゃいましたが、実際には国際法を守るようにイスラエル政府の政策が変えられることもないのです。国際法遵守という基本的なこともない状況で、2国解決案にせよ1国解決案にせよ、それが実現できるのでしょうか。

¹ イスラエル、米、反動アラブ諸国を指すのだろう。この言葉は2010年にクリントン、ネタニヤフ、アッバスの会談を指して使われた。

オフエル・カシーフ：以前チャットでも別の質問を受けて述べたことがあります。まず第一に、現在のイスラエル政府は人種差別ファシストが実権を握る狂信的ファシズム国家です。ベザレル・スモトリッチやイスマイル・ベン・グヴィルやその他ユダ人（教）至上主義閣僚や議員でいっぱいです。この至上主義は過去の何らかのものを呼び戻すものです。彼らに反対する議員がいれば、今回のパレスチナ国家創設反対を含めて彼らがやってきたことはできなかったでしょう。しかし残念ながら、野党の2政党、ベンジャミン・ガンツの党とヤイール・ラビッドの党もパレスチナ国創設に反対するか、せいぜい投票を棄権する程度で、本当の意味での野党ではありません²。ネタニヤフとの連立に参加したがったり、与党と正面切って戦うことをしない臆病者で、私は厳しく批判しています。我々の党を除いては本当の反対党はいません。そのため、事態は非常に悲観的に思えます。我々はクネセト議員120人のうちたった5人なのです。

本当に変化を起こすためには反対党や運動、勇気ある反対が必要です。そのためには二つのことが必要です。一つは圧倒的多数の民衆が街頭へ出て、ジェノサイドに反対し、平和的政治的解決を求めることです。それが臆病者野党への圧力となるかもしれません。もう一つは国際的圧力です。国内及び国際的圧力が結合すれば、狂信者と政府に何らかの影響を与えるでしょう。私自身は狂信者とその政府が変化するとは期待していませんが、野党の中のネタニヤフとの連立に反対するが恐怖のために黙っている人々に勇気を与え、行動への刺激になると期待しています。ファシストに反対する行動が必要なのです。それには国際社会の支援が必要です。国際的支援がなければ絶望的です。我々の力は弱いので、外からの支援が要るのです。

私は先週その旨のことをネットでツイートし、それを拡散してくれとお願いしました。私の母方の祖父母は、1939年以前にポーランドを出たので、ナチによる殺害を免れた数少ない人です。家族の他の者はみんな一何十人も一殺害されました。多くの人々が殺害されました。国際社会が黙っていたことも一因となって、大虐殺が起きたのです。国際社会はそれを止める行動を起こしませんでしたし、気にもかけていなかった。私が恐怖するのは、今また同じようなことが起きているのに、国際社会は歴史から何も学んでいないように見えることです。自分を民主主義者、自分をリベラルと思っている人々が何もしないのです。80～85年前と何ら変わっていません。血塗られた人類史の一コマがまたもや繰り返されているというのに、この沈黙と見て見ぬふりに、私は怒りと苦しみと失望を覚えます。

ターリア・バロンチェリー：今度は状況が違いますよ。今度は見えているのです。ジェノサイドがSNSなどでライブ配信されています。何が起きているのかを見るための技術がなかった時代とはちがうのです。私たちの前で起きているのです。同時にイスラエルが自らの行動を正当化する言説も、民間人被害を最小にするように努力しているという言説も流れています。そのような事態は残念です。

オフエル・カシーフ：イスラエルの言説は大嘘です。それはみんなが知っています。イスラエル政府は意図的に流血の虐殺をやっています。イスラエル政府は血に飢えたファシスト狼です。しかし、そのことを口にするのは大変困難なのです。ご承知のように、私は、昨年、政府の暴力を議員の義務として国民に知らせたために、45日間の議員資格停止の処分を受けました。スモトリッチの犯罪的計画を国民に知らせたためにクネセトへ出席できなくなったのです。最近では、私が南アフリカの国際司法裁判所へのイスラエル・ジェノサイド告訴を支持する請願書に署名したことでクネセト議員資格をはく奪する弾劾の動きもありました。弾劾には90人の議員の同意が必要ですが、同意したのは86人でした。今度はクネセト倫理審査委員会に対して数千人の苦情が提出されて、私を数か月間議員活動停止決定が今月末に出るかもしれない状況です。私が何か犯罪的なことをやったからではなく、私の言動が政府の気に入らないという政治的理由からの処分です。私は国民に対する議員としての義務として、そしてなによりも人間としての義務から発言し行動しているのです。南アフリカの告訴を支持したこと、ネタニヤフを殺人者と表現したこと、ガザで行われていることに関してジェノサイドという言葉を使用したことが議員活動停止処分の理由です。中東で唯一の民主主義の国で起きていることです。

ハダシュ党内でパレスチナ人に対する犯罪について話し合いましたが、イスラエル内部で、ジェノサイドに反対し、和平を求め、イスラエル内パレスチナ国民に対する差別と迫害に抗議する人々への政治的迫害についても議論しました。免責を受けている議員ですらも迫害されるので、ものが言えなくなっています。今こうしてインタビューを受けていますが、これもイスラエル政府にとっては犯罪行為となるので、また何らかの制裁があるでしょう。でも、私は沈黙しません。真実を語ることが私の義務なのです。

ターリア・バロンチェリー：ええ、それはあなたの義務です。あなたは野党が存在しない、政府に反対する声がほとんどないとおっしゃいましたが、本当にそれが不在なのか、それとも怖いから黙っているのですか。ガザ北部に

² 日本でも国民民主や維新など同様な野党がいることが思い浮かばれる。—HP 管理人による註。

対して考え出した計画から判断すると明らかに好戦的反パレスチナ人物だと思われる退役将軍ギオラ・エイランドさえ中道左派と見做されました。彼とか、ヤイル・ラビッドやベニー・ガンツなどの人物がネタニヤフと比べれば左寄りだと見做されているのは興味深いですね。いかにイスラエルの政治システムが極右化したかの証拠ですね。ネタニヤフの司法改悪を少しでも批判すれば左派にされるのです。10月7日事件の前には、ネタニヤフの最高裁システムの改悪に対する抗議運動がありました。エイランドもイスラエル軍内の人々が司法改悪に反対することを奨励していました。これらの人々ある程度イスラエルの民主主義を大切に思っていたのですが、パレスチナ人を含むみんなの平等という民主主義は考えつかないようでした。イスラエル社会内の分裂というか急進化はあるのか、もう少し詳しく話していただけませんか。

オフエル・カシーフ：まず第一に、ネタニヤフの司法改革はクーデターの見かけをよくした表現で、司法の独立をなくして、司法を政府の思い通りに扱えるようにするもので、民主主義の否定です。民主主義の基本は平等ですから、イスラエルはいまだかつて民主主義国であったことはありません。イスラエルは反平等原則に基づいて作られた国です。多数派にせよ少数派にせよ、人口の一部の国、民族とかジェンダーとか階級とか一部の層の特権層とする国は、彼らが多数派であったとしても平等を否定するので、真の民主主義国ではありません。デモクラシーのデモス (demos) はギリシャ語で国民すべてを表すのです。私はイスラエルを特定民族至上主義の「エスノクラシー」と呼びます。「エスノス」というのは特定社会の特定の民族グループを指す言葉です。その意味で、イスラエルは常に民族主義であり、民主主義ではありませんでした。

私は今の政府をイスラエル史の中で最も平等な政府だというジョークを言ったことがあります。従来の政府はアラブ人を抑圧しましたが、今の政府はユダヤ人も抑圧・弾圧するからです。自分の気に入らないものを誰でも平等に抑圧するという意味ですが、これはジョークで、本当の平等ではなく、パレスチナ人への弾圧はユダヤ人に対するより過酷であることは言うまでもありません。

現在イスラエルの政治的迫害はこれまでになかったほど厳しいものです。ご承知のようにイスラエル内パレスチナ人は1948年から1966年まで軍の統制下にありました。行動の自由も言論の自由もありませんでした。それが終わったのは1966年です。しかし、翌年の1967年からは西岸地区、エルサレム、ガザの占領が始まります。つまり、イスラエルはずっと軍事統制下にある国だったのです。

ターリア・バロンチェリー：すごいですね。西岸地区とガザの占領地のパレスチナ人も民政ではなく軍政下にあるわけですね。

オフエル・カシーフ：ええ、1967年以降はね。だから軍事統制するイスラエルは民主主義国家なんかではなかったのです。先ほど言いかけたように、政府の抑圧水準は1966年の軍事統制化時代よりひどくなっています。政府を批判したり反対する声に対する迫害は、たとえクネセト議員であっても、容赦しません。私への弾圧の例を挙げましたが、クネセトにいる私自身のことや、特に私がユダヤ人であるという理由で、私の友人よりも言論の自由が制限されていることについては、お望みならば後でもっと例を挙げたいと思います。

占領下のパレスチナ人は言うまでもなく、イスラエル国民に対しても、以前より厳しい抑圧と迫害があります。例をあげますと、先週、パレスチナ系イスラエル国民の女性教員がTik Tokで自分のダンスを発表しました。Tik Tokは自動的に日時を発表します。彼女は10月7日に踊ったのです。たちまち彼女は逮捕され、鎖に繋がれ、目隠しをされました。去年の10・7の虐殺を祝賀したとされたのです。まったくとんちんかんなこじつけか誤解で、さすがに当局は彼女を釈放せざるを得ませんでした。この小さな例は氷山の一角で、もっと酷い例がたくさんあります。ほとんどがパレスチナ系国民に対してですが、民主派のユダヤ国民に対しても抑圧は及んでいます。

私の親友、私と同じユダヤ人で、評判の良いベテラン教師、40年間も教壇に立ってきた友人が、去年、あの10・7の虐殺の直後、ガザでイスラエル軍によって殺害された子どもたちの年齢と名前をフェイスブックで発表しました。イスラエルでは普通パレスチナ人には名前なんかなく、単なる数字以外のなにものでもありません。友人はパレスチナ人を人間扱ったのです。彼は学校を首になりました。市当局は市内のどの学校でも彼が教えることを禁じました。2日以内に教育委員会は彼の教員免許を無効にしました。逮捕されて4日間留置場に拘禁され、反逆罪で起訴されました。裁判官の前に被告として立ちましたが、すぐに無罪放免になりました。彼は市と教育委員会を告訴し、勝利しました。これも氷山の一角で、これに似た政治的迫害はたくさんあります。ジェノサイド、虐殺、戦争犯罪に反対する人間を黙らせる政治的迫害が日常的に続いています。

ターリア・バロンチェリー：その人を映した映像を見ました。彼が勝利して学校に復帰したとき生徒たちが彼を罵る場面があって、びっくりしました。

オフエル・カシーフ：誰が罵ったのですか。

ターリア・バロンチェリー：あなたの親友先生に生徒たちが、お前なんか死んでしまえとかそういう恐ろしい罵声を浴びせたのです。彼を支持していない生徒がいるようですね。

オフエル・カシーフ：ええ、それは氷山の一角にすぎません。そういう生徒はいるし、そういう雰囲気はイスラエルにはあるのです。私への弾劾や議員資格停止攻撃については話しましたが、私の同僚たちも自由に物が言えない状態です。

数か月前、軍刑務所でイスラエル兵たちがパレスチナ囚人を拷問し性的虐待をした事件が記事になりました。私がこの問題をクネセトで取り上げようとしたとき、野党の議員たちからも妨害されました。ヤイール・ラビッドのイエシュ・アティド党が私に対する苦情を議会倫理委員会に申し立てたのです。本当に起きた問題を取り上げるのは国家を屈辱することになると考えたのでしょう。

ターリア・バロンチェリー：ネゲブ砂漠にあるスデ・テイマン拘留センターで起きた事件で、ビデオ映像があります。

オフエル・カシーフ：そう、スデ・テイマンです。これは珍しいことではなく、たくさん・・・

ターリア・バロンチェリー：イスラエル兵がパレスチナ囚人を性的虐待する映像がありますが、同時にクネセトやテレビでは加害者兵士を正当化する言説があり、兵士を擁護する民衆のデモもありましたね。

オフエル・カシーフ：私は虐待問題をクネセトで取り上げることを許されませんでした。野党の一部が私を嘘つきと罵倒しました。だれもが知っている事実なのに。スデ・テイマン刑務所の問題以外に、警察の暴力―囚人の強制収容所、パレスチナ人被拘禁者に対する暴力―があります。イスラエルには警察なんかありません。ベン・グヴィルの民兵があるだけです。

ターリア・バロンチェリー：ベン・グヴィルは国家安全保障大臣ですので、警察を支配・軍事化できるのですね。

オフエル・カシーフ：彼は警察を軍事化し、ファシスト化しました。警察は今もイスラエル警察と名乗り、制服も同じですが、今やベン・グヴィル大臣や政府の私的民兵のようになっています。人質家族を含む抗議デモなど、市民デモに暴力をふるっています。人質家族は組織的に殴打され、逮捕されています。警察という名の民兵の他に、極右過激派民兵や武装民兵がいます。彼らは私たちを銃撃できる D デイを待っています。D デイは迫っており、彼らは銃撃命令が降りるのを待っているのです。

ところで、スデ・テイマン軍基地で加害者兵士を擁護する暴動が起きたとき、警察は出動要請を受けただけで、出動しませんでした。憲兵が加害者兵士を捕らえて捜査するためにスデ・テイマン基地に入ろうとしたとき、兵士が許可しませんでした。いや、すいません、兵士ではなく支援群衆が妨害しました。群衆は基地へなだれ込み、基地の兵士が憲兵に暴力を振るいました。その後、軍事裁判所が存在する別の基地に侵入し、容疑者を調査するはずの兵士や、それらの凶悪犯の侵入を許可しなかった兵士を攻撃しました。基地は彼らを守るために警察に出動要請をしたのですが、ベン・グヴィルの秘書が行くなど命じたので、動きませんでした。

一方で警察は民主主義を求めるデモ、ジェノサイドに反対するデモ、人質家族の停戦と捕虜交換を求めるデモを、残酷な暴力で弾圧します。そのくせ、狂信的入植者の無法活動を取り締まらないのです。入植者は加害者擁護のために基地へ乱入して暴力を振るいましたが、彼らには手を出さないのです。これがファシズムの姿です。

ターリア・バロンチェリー：ええ、リクード党のタリー・ゴトリフという極右の女性議員が性的虐待の調査をするなど主張して、スデ・テイマンやその他の刑務所に行っていますね。

オフエル・カシーフ：そういうことをやる議員も何人かいますし、大臣だっている。イスラエルはもう法治国家ではないのです。

ターリア・バロンチェリー：そういうことが再生産されているのはまさに階級問題ですね。占領と不平等が深く根付いているのを理解するためには、そこで働いている階級要素を見ることが必要ですね。

オフエル・カシーフ：その通りです。

ターリア・バロンチェリー：ありがとございました。今回は、あなたの哲学的なインスピレーションや興味についてお話できるとおもいます。あなたは反体制活動というユダヤ人の知的伝統を引き継いでいると言ったことがあります。確かに主流派に抵抗し、不平等に反対し、正義のために戦ったユダヤ人思想家がいます。次のインタビューではあなたの思想や関心をお聞きしたいと思います。

オフエル・カシーフ：喜んでお相手します。

ターリア・バロンチェリー：theAnalysis.news をご覧いただきありがとうございます。また次回お会いしましょう。ありがとうございました。

